

## [第2回] トレジャリー・マネージメント における預け口座のリコンサイル

柳 洋 二 郎

サンガードジャパン  
トレジャリー・ソリューションディレクター

前回、リコンサイルのシステム化が進んでいる企業が少数派であり、また、さまざまな課題があることを述べた。本稿では、専用ソリューションによるリコンサイルの自動化のイメージおよび自動化に伴うROIについて述べる。

### リコンサイルの自動化

従来のマニュアルでのリコンサイルは、O U R 側とT H E I R 側のデータを帳票に出力し、双方を比べながら、ライン・メーカーを用いて消し込んでいく作業が中心であった。O U R 側、T H E I R 側のデータがランダムな順番で帳票出力されると、目検での消し込みは難しいため、金額の大きい順にソートして出力する方法では1・・・1の突合は良いが、1・・・NやN・・・Nのケースは困難が伴った。また、当日突合しなかった入出金予定（実績）は、翌日に繰り越す必要があるため、複数の帳票を大きな机の上で展開しながらの作業になる。これに対し、専用システムを用いた場合のメリットは、1・・・NやN・・・Nを含め突合を自動で行うこと、未突合のデータのみを対象に作業を行える

こと等が挙げられる。一方、O U R 側、T H E I R 側のデータ取り込みはシステム化のためには避けて通れない関門になる。

それでは、専用ソリューションを用いた自動化のイメージを順次述べる。まず、突合の自動化であるが、いわゆる突合ルールをあらかじめ作成登録し、流すことが可能である。突合ルールでは、一般的にO U R 側とT H E I R 側の任意の項目と突合するというルールを作成できる。例えば、R E F、金額、通貨、送信人の全てが一致すればマッチ、金額、通貨のみの場合はマッチ候補という具合である。これらのルールは全てのデータに対して適用することも、特定のデータに対して（例えばA銀行分）のみに適用することも可能である。以上の機能を利用して、従来の目検での突合ノウハウをあらかじめ突合ルールに組み込むことで、個人のスキルへの依存からも脱却できる。自在に定義できる突合ルールにより、通常、出金側はほぼ一〇〇%、入金側も六〇〜七〇%は自動でリコンサイルが完了する。

ワークスペースに表示し、さまざまなキ―でソート、検索、抽出し突合作業を行っていくことが可能である。これは、E X C E L の機能を用いて、ソート、抽出するのと似たイメージになる。

最後に、データ取り込みであるが、専用システムであってもこの部分は容易ではない。以下にその要件と専用システムにおける対応を説明する。

まず、O U R 側のデータとしてE R P システムからの入出金予定（A P / A R および金融取引から発生する入出金）を取り込む必要がある。項目としては、入出金金額、入出金区分、通貨、決済日（期日）、R E F、入出金口座が最低限必要である。これ以外にも、支払先/送金人の、入出金目的等の情報は、リコンサイルの精度を上げるため取得が望ましい。優れた専用ソリューションでは、リコンサイルの精度を上げるための補助フィールドを自由に追加できる仕組みが備わっている。また、G U I ベースでデータ取り込みの定義を自在に設定できるものもあり、これにより開発工数を大幅に削減できる。G U I による定義機能には、通常、値の簡単な計算機能、不要な文字列



の削除機能（例…ゼロ、スペースやカンマ等を取り除く）、一部文字列の抽出機能、コード変換機能等が用意される。これらの機能により、例えば、余分なハイフオンが入っているREFをクリーンアップしたり、ナラティブなフィールドの中に埋もれているREFを抽出すること等が可能になる。取り込みタイミングに関しては、通常は一日一回で十分である。最後に、データの取り込み方法であるが、一番理想的なのは当日入出金予定のデータのみを取り込むことである。これが困難な場合、次善策として、日々発生した入出金予定を差分で取り込む方法もあるが、この場合、取り消し、訂正が発生し管理が煩雑になる。

次に、THIEIR側のデータであるが、要件としては、基本的にOUR側と同じである。しかしながら、銀行のFB、SWIFTではREFや支払先、送金人等必要なデータがないケースが散見される。SWIFTからの異動明細の取り込みは標準機能として提供されているのが一般的であるが、前記のようなデータの不備を補足するため、OUR側以上にGUIベースのデータ取り込み定義機能が重要になってくる。取り込みタイミングに関しては、OUR側と異なり、一日複数回が一般的で、カットオフの時間に近づく

につれ頻度が増える。

以上、専用ソリューションでは大幅な自動化、省力化が可能であるが、インターフェースの構築部分がポイントになる。

### ROI（投資対効果）

リコンサイル業務の効率化における定量的な効果は、一般的に、作業時間および不適切な資金繰りによる金利負担（赤字および余剰資金の借入）の削減になる。一方で、定性的な効果としては、不正な支出や誤送金、誤入金の早期発見になる。弊社の調査では、マニュアルによるリコン

サイルは、一人一日二〇〇〜三〇〇件程度（OUR／THIEIR合わせて四〇〇〜六〇〇件）が平均値であった。すなわち、一日一、〇〇〇件程度の入出金がある企業では、全てマニュアルで行っているとすると五人程度の担当が必要になる。これを専用システムで自動化すると、およそ全体の八〇％が自動で突合できるため、マニュアル分は一人分の作業になる。

以上をベースに、海外の大手A銀行で弊社のリコンサイル・ソリューションを導入したケースについて紹介する。A行では、もともとリコンサイル業務をシステム化しており、一日八、〇〇〇件からピーク時一五、〇〇〇件程度の入出金取引を一七人体制で処理していた。旧システム

では、マッチング率が六五％程度で、1…NおよびN…Nの突合がほとんどできていなかった。また、自動突合できなかった取引は帳票上で消し込んでいた。通常時はマニュアル突合の件数が二、八〇〇件程度なので、多少余裕があるが、ピーク時は五、〇〇〇件以上で、翌日に作業が持ち越すことが常であった。A行では旧システムの更新時期であったこともあり、弊社ソリューションにてシステムを刷新した。導入により1…NおよびN…Nの自動突合、取り込みデータのより精緻なクリーン・アップ、画面上でのマニュアル突合を実現し、マッチング率も八五％強となった。結果として一人体制となり、六人ほど人員の削減を行ったのみならず、帳票による消し込みのために日々四〇〇〜八〇〇枚出力していた紙が全て不要となり（これに伴い、大型のプリンター、インク等も不要化）、保管スペースも不要となった。人員のみに注目した単純なROIを計算すると、全てマニュアル作業で行うと四〇人程度が必要となるのに比べ、システムの導入により三〇人程度削減できており、人件費は金額にして年間二億円程度の削減になる。本例は銀行のケースのため、構築コストもそれなりにかかっているが、十分に効果が上がる投資と判断できる。